

「かいつまんで言う」ときの時制 ①

岸 彩子

1. はじめに

あるエピソードの概要を述べる時、フランス語では、次の例のように直説法現在形（以下「現在形」と略）が用いられることもある。

例 1) Les faits sont très simples. Trois personnes partagent un repas comprenant entre autres du homard en conserve. Dans le courant de la soirée, toutes les trois sont prises de malaise et font venir à la hâte un médecin. Deux d'entre elles en réchappent, la troisième en meurt. (Christie *Miss Marple au club du mardi*)

「事実はごく単純なものだ。3人が缶詰のオマールを使った料理がある食卓を囲む。夜も更けたころ、3人とも具合が悪くなる。急いで医者を呼ぶ。2人は助かる。3人目は死ぬ。」

例 1 の英語の原文（例 2）では、過去形が用いられている。エピソードは普通、過去に起きたことであり、過去時制の使用は妥当に思われる。フランス語でも過去形の要約の例も多くみられる（例 3）。

例 2) The facts are very simple. Three people sat down to supper consisting, among other things, of tinned lobster. Later in the night, all three were taken ill, and a doctor was hastily summoned. Two of the people recovered, the third one died. (Christie *The Thirteen Problems*)

例 3) Je l'ai tué en premier.[...] Je l'ai abbatu, puis elle, mais, lui, je l'ai mis dans le coffre de ma voiture et je l'ai balancé quelque part [...] (Block *Keller en cavale*)

「先に彼を殺したの。彼を撃って、それから彼女を撃った。彼をトランクの中に入れて、捨てた。」

では、例 1 のような、現在形が用いられた要約は、過去形のものとはどう違うのか（疑問 1）。

また、例 1 は、エピソードを要約せずに語る、いわゆる語りの現在とも異なるふるまいを見せる。

例 4) On tombe ! [...] On plonge. L'avion chute comme un pierre. Là-bas, un passager fait un vol plané et se tape la tête contre le plafond. Il saigne. Je suffoque, accrochée à mon siège [...] Des sacs volent, des verres se renversent. Une des hôtesses essuie le sang sur son visage. Il y a une minute, elle distribuait des cacahuètes en souriant.[...] Derrière moi, quelqu'un récite le *Je vous salue Marie* et une nouvelle vague de

terreur m'envahit. Les gens font leur prière. [...] L'Américain assis à côté de moi me regarde, le visage livide et tendu.

(Kinsella *Les petits secrets d'Emma*)

「落ちてる! 急降下する。飛行機は石のように落下する。向こうで乗客が飛ばされて天井に頭をぶつける。血が出る。私は息を止めて座席にしがみつく。バッグが飛び交い、コップは倒れる。CA が顔の血を拭いてる。1 分前、彼女は笑顔でピーナツを配ってたのに。私の後ろで誰かアヴェマリアを唱え、またすごく怖くなる。みんな祈ってる。私の隣のアメリカ人が、ひきつった青い顔で私を見る。」

例 4 の現在形が表す複数の事態は、同一もしくは近接する空間で、時間的には連続して起きている。また、この文章には、「落下する」「飛ぶ」「ぶつける」などの事態をその場で見ているように読者に感じさせる、いわゆる現前効果がある。

これに対し、例 1 では、現在形の連続が、必ずしも事態の時間的・空間的連続を表さない。また、現前効果も感じられない。どちらも、過去の事態を表す現在形でありながら、このような違いはどこから来るのか(疑問 2)。

本稿では、上記の疑問 1、2 について、次のような立場から考察する。フランス語現在形自体には時間性はなく、組み合わせられる領域によって「今ここ」などの特定の時間の事態を表すと考える。領域には、一時点に限定されたものと、一時点には束縛されないものの 2 種類あり、これは I モード (Interactive mode of cognition) と D モード (Displaced mode of cognition) (中村 2009) の対立に重なる。両モードについては後述する (2-2)。このような立場から、以下のことを主張する。例 1 のような現在形は、個々の出来事をその場に視点を置いて表す I モードの述べ方ではなく、複数の事象を一度に考慮に入れ、これらを判断の対象とする D モードの述べ方である。このため、複数の出来事が全体として一つのまとまりをなすことが強調されることになる。

2. フランス語直説法現在形の非時間性

2-1 現在形を巡る 3 つの説

まず、本稿では現在形をどのようなものとして捉えているのか、明らかにする必要がある。

本稿では、「現在形にはどのような時間性もない。事態の定位は文脈による」とする、現在形非時間性説 (Serbat 1980, 1988, Bres 2005 など) を採る。この説のほかに、「現在形は発話現在時の事態を表す」とする現在時説、Wilmet (1997)、Gosselin (2005) などによる「現在形は話者にとっての現在の基準を表し、この基準は時間軸上のどの時点にも置かれ得る」とする同時性説があるが、本稿で非時間性説を採るのは次のような理由による。

現在時説では、本稿の問題とする例 1 のような現在形も含め、過去、または未来を表すものなど、現在時での事態を表さない用例は等しく例外として扱われてしまう。これに対して、同時性説では、過去の事

態も、事態の時点が「現在の基準」となって表すとする。この考え方は、例 4 の語りの現在をうまく説明できるように思える。しかし例 5 のような「不変の真理」、「総称」、「ことわざ」などの、「時間軸上に位置付けられない用法」(Brunot1953、Touratier1996)が問題となる。このような場合はどこを基準と考えるのか。

例 5a) L'eau bout à 100 degrés. 「水は 100 度で沸騰する」(不変の真理)

b) Les castors construisent des barrages. 「ビーバーはダムを造る」(総称)

c) Qui se ressemble s'assemble. 「似たものは集まる= 類は友をよぶ」(ことわざ)

また、先に見たように、語りの現在と例 1 の現在形には、現前効果の有無などの違いがあるが、この違いに関しても、有効な説明ができない。これらはどちらも過去時の事態を表す現在形であり、同時性説では、どちらも過去時を「現在の基準」とする、同様の用法ということになってしまう。一方、非時間性説を採れば、現在形の形態自体には、どのような時間性も書き込まれていないのだから、汎時間的、非時間的事態(不変の真理等)を表すものなど、時間軸上には定位できない用例とも矛盾は出ない。

だが、非時間性説にも問題はある。形態に「現在時」という意味が含まれないとするのであれば、語りの現在にある「現前効果」はどのように説明されるのか。現在形が非時間的なものであるのなら、現在形を使うこと自体には「あたかも現在のような」効果を生み出す要素はないことになる。ではどのようにして例 4 の「現前効果」は生じているのか。このことを考えるには領域という概念が有効であるように思われる。

2-2 領域

Recanati (1996)では domain of discourse 「談話の領域」という概念が提唱されている。

So we see that utterances, like quantifier phrases, are interpreted relative to some partial, contextually determined *domain of discourse* rather than to a fixed, total world. (Recanati1996 強調は筆者)

J'ai déjeuné. 「お昼を食べた」と言うとき、話者の意図は「生まれてから今までの間に一度はお昼を食べた」ではなく「今日になってから今までの間にお昼を食べた」ということにある。「今日」が、言語的に明示されなくとも、話者はこの事態 je-dejeuner が成立する範囲を「今日になってから今まで」に限っているということになる。この、文解釈時に考慮に入れるべき範囲、文が成立する範囲が、談話の領域 domain of discourse である。聞き手はこの範囲を了解し、「話者は今日のお昼をもう食べた」と正しく解釈する。以下では domain of discourse を「領域」と略す。

Recanati は、どのような文でもその領域と相対的に解釈されるとする。先に見た現在形非時間性説にこの考え方を取り入れ、本稿での現在形の捉え方は次のようなものになる。

本稿での現在形の捉え方：フランス語現在形は、その形態自体では事態が成立する範囲（＝領域）を設定することはできず、その結果、単独である時点を述べることはできない。しかし、適切な領域が設定され、その領域の中で成立するという了解が予め話者―聞き手間でなされていれば、ある特定の時間区分のものとして事態を表すことが可能になる。

時制の形態ではなく、領域が時間性を付与すると考えることで、現在形の様々な用法が統一的に説明できる。現在形の *Un lapin saute* は「今ここでウサギが跳ねている」という発話現在時の出来事解釈と、「ウサギは跳ねるものだ」という属性解釈の2つが可能である。同一形態に異なる解釈が導き出されるのは、一方は「発話の時空」、他方は時間的には限定されない「ウサギ全般」という、異なる領域と組み合わせられるためであると考えることができる。²⁾

前者は、話者が *lapin-sauter* という事態を知覚したまま表した文という解釈である。知覚には時間・空間的に限りがあり、その範囲を聞き手も了解している。事態が生起するのは、この範囲の中に限られる。発話現在解釈の場合、話者が知覚する時間的・空間的範囲を領域とすることで、事態の知覚を表す。³⁾

後者の属性解釈の場合には、知覚の一時空には束縛されない。この場合には、いつ「ウサギが跳ねる」という事態が生起するのかは問題にならず、話者は、ウサギについての知識があれば、事態を見ていざとも発話できる。このような場合、領域は文のテーマによって限定され、文は、「テーマについて、このようなことを知っている」という話者の知識を伝達するものとなる。知識を表す文の場合、「何について述べているのか」というテーマが話者―聞き手間で共有されず、したがって領域限定がなされないと、「なぜそのようなことを言うのか」という問いを誘発する。例6では、発話全体にかかるテーマ「動物の困った習性」が領域として共有され、「ウサギというのは飛び跳ねるものだ」と解釈される。

例6) *On ne veut pas d'animaux à la maison. Un chien aboie. Un chat gratte. Un lapin saute...*

「家では動物は飼いません。犬は吠えるし、猫は引っ掻くし、ウサギは飛び跳ねるし…」

現在形は、領域によって、知覚、または知識を表す。知覚の対象は、事態の生起する状況で、このとき視点はその状況の中に置かれる。これに対して、知識は認識判断の対象であり、「p については q である」という命題である。話者は知識の持ち主であるため、視点は特定の時点には置かれない。

この知覚／知識の表現の対立は、⁴⁾ 中村(2009)で提示される I モード／D モードの認知のあり方の対立に重なる。中村(2009)では、認知のありように2種類あるとされている。主体が状況の中に入って、状況との身体的インタラクションを通じて認知像を形成する I モード (Interactional mode of cognition) と、認知像を客観的な存在として状況の外から捉える D モード (Displaced mode of cognition) である。この2つの

最も顕著な違いは、状況との身体的インタラクションがあるか否かである。⁶⁾ 知覚もまた、状況への身体的インタラクションであり、知覚を表す文はIモードの表現であると言える。

3. 語りの現在の領域と視点

知覚はその主体と不可分である。発話現場の出来事を述べる現在形では、この知覚の主体 (©) は話者である(図1)。これと同様のことが語りの現在にも言える。例4の現在形が表す事態は、文脈で設定された状況で生起すると解釈されるが、このとき、その状況内で事態を知覚する主体 (©') が想定される(図2)。⁶⁾ この場合も同様にIモードの表現であると言える。例4の現在形 *voie*、*se renversent* などは、飛び交うカバンや倒れるグラスという事態を、その場で順次、見ているものとして述べている。また *chute* 「落ちる」、*plonge* 「急降下する」も同様に、その場での身体感覚を述べている。

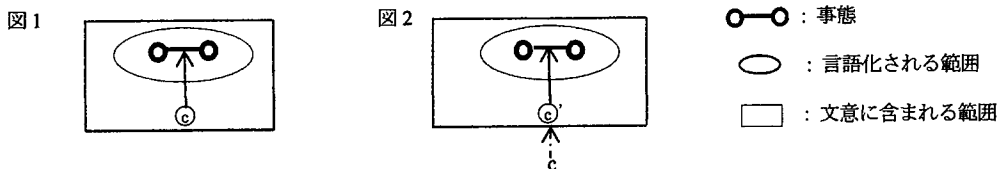


図1 « Tiens, un lapin saute ! »(発話現在)

図2 « Des sacs volent ... »(例4 語りの現在)

語りの現在が知覚を表すIモードの表現であることは、例4に、その場にいる主体の知覚体験であることを明示する *J'entends* 「聞こえる」を加え、例7のようにしても、同じ状況を伝えることからも明らかである。

例7) *Derrière moi, quelqu'un récite le Je vous salue Marie et une nouvelle vague de terreur m'envahit. {Les gens font leur prière./ J'entends les gens qui font leur prière.}*

「私の後ろで誰かアヴェマリアを唱え、またすごく怖くなる。{みんな祈ってる/みんな祈ってるのが聞こえる}。」

また、例4では、知覚の主体を中心とした直示表現も用いられている。*derrière moi* 「私の後ろ」、*à côté de moi* 「私の隣」のように、明示された登場人物「私」が知覚主体の役を担っており、この人物の知覚の方向・範囲にしたがって、文は解釈される。この知覚主体は読み手にすでに共有されており、例8のように、直示表現から *moi* 「私」を取りさっても、同じ状況を伝達することができる。

例8) {*Derrière moi / Derrière*}, *quelqu'un récite le Je vous salue Marie et une nouvelle vague de terreur m'envahit. [...]* *L'Américain assis { à côté de moi / à côté } me regarde [...]*

「私の後ろで/後ろで誰かアヴェマリアを唱え、またすごく怖くなる。{私の隣の/隣の}アメリカ人が私を見る。」

例4は「私」で表される主体の知覚を表す。現在形の出現順序は、時間的に連続して起こる事態が知覚された順、即ち事態の生起順を踏襲する。順番を変えると、伝える状況は違うものになる。

4. 生起時点に視点を置かない過去現在

4-1 「かいつまんで述べる現在形」は知覚を表さない

前節では、例4のような語りの現在は、知覚体験を模したIモードの表現であるということを見た。例1の「かいつまんで述べる現在形」には、上で見たような特徴は見られず、語りの現在とは異なる。

まず、「かいつまむ現在形」はその場での体験を表さない。例1に、知覚を明示する表現 *On voit* 「見える」を入れると奇妙に響く。

例9) *Les faits sont très simples. Trois personnes partagent un repas comprenant entre autres du homard en conserve. Dans le courant de la soirée, toutes les trois sont prises de malaise et font venir à la hâte un médecin. { Deux d'entre elles en réchappent, la troisième en meurt. / ?? *On voit* deux d'entre elles qui en réchappent, la troisième qui en meurt. }*

「事実のごく単純なものだ。3人が缶詰のオマールを使った料理がある食卓を囲む。夜も更けたころ、3人とも具合が悪くなる。急いで医者を呼ぶ。{2人は助かる。3人目は死ぬ。/??2人は助かり、3人目は死ぬのが見える。}」

第二に、例1の現在形の連続は、事態の時間的・空間的連続を表さない。個々の事態は互いに独立した時空に起こる。このことは「夜も更けたころ」のような、一句のみに掛かる時間表現が共起可能であることから分かる。

例1(再掲) [...] *Trois personnes partagent un repas comprenant entre autres du homard en conserve. Dans le courant de la soirée, toutes les trois sont prises de malaise.*

「3人が缶詰のオマールを使った料理がある食卓を囲む。夜も更けたころ、3人とも具合が悪くなる。」

互いに時間的・空間的に離れた複数の事態を連続して知覚できるような主体は想定しにくい。これらの現在形は知覚の表現ではなく、したがってその領域は知覚の範囲ではないということになる。

例1の現在形では、知覚の一時空よりも広い範囲を考慮に入れなければならない。このことは、例1には *quand* 「～する時」のような2つ以上の事態を時間的に関係づける表現(例10)、また、*puisque* 「～なので」のような2つ以上の事態の論理関係を述べる表現(例11)が共起することからも確認できる。

例 10) [...]Trois personnes partagent un repas comprenant entre autres du homard en conserve. *Quand* toutes les trois sont prises de malaise, elles font venir à la hâte un médecin. [...]

「3人が缶詰のオマールの料理がある食卓を囲む。3人とも具合が悪くなったとき、急いで医者が呼ばれる。」

例 11) [...]Trois personnes partagent un repas comprenant entre autres du homard en conserve. *Puisque* toutes les trois sont prises de malaise, elles font venir à la hâte un médecin. [...]

「3人が缶詰のオマールの料理がある食卓を囲む。3人とも具合が悪くなったので、急いで医者が呼ばれる。」

quand や puisque のような表現を使うためには、事態が生起する状況で得られる情報だけでは十分ではない。二つの事態が、互いにどのような時間的、または論理的関係にあるかを判断するには、個々の事態の生起する状況を離れて、二つの事態を同時に考慮に入れなければならないからである。例 1 の現在形は、複数の状況を含む領域で解釈される。

また、例 1 の現在形は、複数回続く場合、文の順序を変えることができる。最後の 2 文の、réchappent 「助かる」と meurt 「死ぬ」は、実際にどちらが先に起きたことかは明らかではなく、この 2 文を入れ替えても、文章全体の意味は変わらない (例 12)。

例 12) Les faits sont très simples. Trois personnes partagent un repas comprenant entre autres du homard en conserve. Dans le courant de la soirée, toutes les trois sont prises de malaise et font venir à la hâte un médecin. { Deux d'entre elles en réchappent, la troisième en meurt. / L'une d'entre elles en meurt, deux autres en réchappent. }

「事実はごく単純なものだ。3人が缶詰のオマールを使った料理がある食卓を囲む。夜も更けたころ、3人とも具合が悪くなる。急いで医者を呼ぶ。{2人は助かる。3人目は死ぬ。/1人は死ぬ。後の2人は助かる。}」

これは、語りの現在では、文の出現順序は事態の生起順であるため、変えると伝達する状況が違うものになってしまうのと対照的である。かいつまんで述べる現在形 (例 1) では、時点の差、時間の前後はさほど重要ではないということになる。

ここで疑問 2 に答えることができる。例 4 のような語りの現在は、状況に身を置いて知覚したままを述べる I モードの表現であるのに対し、例 1 のようなかいつまんで述べる現在形は、話者が複数の状況を同時に認識する視座から、客観的な知識として述べる、D モードの表現である。

4-2 領域設定の必要 (過去時制での要約との相違点)

I モード、D モード、いずれの表現でも、現在形には領域が設定されていることが必要である。では

例 1 タイプの「かいつまむ現在形」の領域を設定しているのは何か。

このような現在形は、複数の事態をまとめた全体を視野に入れた述べ方であることを見たが、その全体がどこまでかを限定する表現 *Les faits sont très simples* が、複数の現在形の連なりの前にある。これが全ての現在形にかかるテーマとして働くことによって、例 1 ではその「ごく単純な事実」の全体が語られるということが、話者一聞き手間で了解されることになる。

あらずじに用いられる現在形も、例 1 と同様の全体を視野に入れた述べ方であると考えられる。例 13 では、物語「クロード・グー」が全体を設定し、その物語全体をかいつまんで述べるということが、あらかじめ聞き手にも了解されている。

例 13) « *Résumé : Claude Gueux de Victor HUGO* » Claude Gueux est un pauvre ouvrier, sans instruction, mais d'un caractère élevé. Il vit avec une femme dont il a un enfant. Réduit au dénuement par le chômage et la maladie, il vole pour manger et pour nourrir sa famille. Arrêté, il a dans la prison une conduite exemplaire jusqu'au jour où, séparé d'un de ses compagnons qui partageait son pain avec lui, par l'ordre du directeur, il tue ce dernier d'un coup de hache en présence de ses compagnons prévenus et immobiles. Il garde devant le tribunal et devant la mort une noble attitude.

(salon-litteraire.linternaute.com)

« *Victor HUGO Claude Gueux あらずじ* » 「クロード・グーは教育もない貧しい工具だが、人柄は良い。彼は妻と子供と一緒に暮らしている。失業と病気からの貧困にあえぎ、彼は食べるため、家族を養うために盗みをする。捕まり、刑務所では模範囚だった(原文現在形)が、パンを分け合った仲間の一人と引き離す命令を出した所長を、仲間が見ている前で、斧の一撃で殺す。裁判でも、死を前にしても、彼は高貴な態度を保つ。」

例 1、例 13 のような、かいつまんで述べる現在では、複数の現在形が表す複数の事態は閉じた集合をなし、その全部が語られることが前提となっている。あらかじめ、事件や物語の全体が領域として共有されているためである。

複合過去のような過去時制であれば、時間性のある自立した形態であるため、時制の出現のたびに、形態自体によって領域が設定される。事件全体、物語全体が、予め領域として設定・共有されている必要はなく、進むにしたがって構築されていく。必ずしも全体が語られるとは限らない。例 3 をより大きい文脈で見ると(例 14)、語り手は事件を最後まで語りきらず、「ああして、こうして」*patati et patata* と投げ出している。だが、一文ずつが自立しているため、止めたところまでで成立する。

例 14) Je l'ai tué en premier.[...] Je l'ai abbatu, puis elle, mais, lui, je l'ai mis dans le coffre de ma voiture et je l'ai balancé quelque part où on ne risque pas de le retrouver si tôt, puis je suis revenue pour faire l'échange des dents, mettre le feu, *et patati et patata*.

「先に彼を殺したの。私は彼を撃って、それから彼女を撃った。彼はトランクの中に入れて、当分は誰にも見つからない場所に捨てた。それから、家に戻った。歯を交換して、火をつけて、ああして、こうして。」

ここで、疑問1に、答えを与えることができる。自立的な時制である過去時制の連なりでは、事態が順次述べられた結果として、全体（物語、事件）が順次構築されていくのと異なり、「かいつまむ現在形」は、予め提示され設定された「全体」を考慮に入れた上で、その構成員としてすべての事態を述べるものである。

5. まとめ

疑問1、疑問2の答えを踏まえ、次のように言うことができる。

現在形は領域がなければ、解釈できない。このため、領域が強く意識されることになる。「かいつまんで述べる現在形」は、複数の現在形の領域である「物語全体」「事件全体」が予め話者・聞き手間で了解されていることで成り立ち、複数の現在形の連なりが一つの全体を形成することが強調される。

注

- 1) 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C課題番号15K02482)の補助を受けた研究成果の一部である。
- 2) どのような時制形態にも領域は設定される。過去時制(ex. 単純過去 *Un lapin sauta.*)は時制形態そのものによって領域設定(過去時)がされる。現在形は時間性を欠くため、予め設定された領域があることによってはじめて時間的な定位が行われる。
- 3) 出来事文は否定しにくいだが、このことも、普通は領域(=発話現場)が共有されているということによると考えられる。*Tiens, un lapin saute!*と言われたとき、たとえその出来事が知覚できなかったとしても、聞き手は出来事存在を否定することはせず、領域の共有が失敗したとみなす。このため、受け答えとして *Non.*は不適切で、領域を空間的に設定しなおす *Où?*などが、適切となる。
- 4) 知覚情報を伝達する文か、知識として情報を伝達する文かの区別は、Vogeleer(1992, 1994)、Facqus(2006)、東郷(2010)でも見られる。
- 5) IモードとDモードの最も顕著な違いは、状況との身体的インタラクションがあるか否かだが、他にもメタ認知的であるか否か、参照点型認知かトラジェクター・ランドマーク型認知か、非有界的認識か有界的認識かの点で対立する。
- 6) 次の語りの現在の例では、登場人物としては描かれていないが、物語のその場にいる人物を想定せよという明示的な指令 *Suivons-le*「つけてみよう」がある。

Non, ce n'était pas chez sa maîtresse que Vincent Molinier s'en allait ainsi chaque soir. Encore qu'il marche vite, suivons-le. Du haut de la rue Notre Dame des Champs où il habite, Vincent descend jusqu'à la rue Saint Placide [...] puis rue du Bac où quelques bourgeois attardés circulent encore. Il s'arrête rue de Babylone devant une porte [...] (Gide *Les Faux-Monnayeurs*)

参考文献

- BRES J., 2005, « Le présent de l'indicatif en français » in Despierres Cl. et Krazem M. (ed.), *Du présent de l'indicatif*, Dijon, Université de Bourgogne, 27-52.
- BRUNOT, F., 1953, *La Pensée et la Langue*, Masson.
- FACQUES, B., 2006 « Présent historique et présent de reportage dans la presse anglaise et française », *Les Carnets du Cediscor*, 9, 113-127.
- GOSSELIN, L., 2005, *Temporalité et modalité*. Duculot
- KAMP, H. & ROHRER, C., 1983, « Tense in texts », in BAUERLE R.R. et al. (eds) *Meaning, Use and Interpretation of Language*, Berlin, Walter de Gruyter, 250-269.
- LANGACKER R., 1985, « Observation and speculation on subjectivity », in *Iconicity in Syntax*, HAIMAN, J., (ed), Benjamins, Amsterdam, 109-150.
- RECANATI, F., 1996, « Domain of discourse », *Linguistics and Philosophy*, 19, 445-475.
- SERBAT G., 1980, « La place du présent de l'indicatif dans le système des temps », *L'information grammaticale* 7, 36-39.
- SERBAT G., 1988, « Le prétendu présent de l'indicatif : une forme non- déictique du verbe », *L'information grammaticale*, 38, 32-35.
- TOURATIER, Ch., 1996, *Le système verbal français*, Armand Colin.
- VOGELEER, S., 1992, « La relation point de vue et son application aux phrases existentielles initiales », in W. de Mulder ; F. Schuerewegen ; L. Tasmowski-De Ryck (eds), *Enonciation et parti pris*, Amsterdam-Atlanta, Rodopi, 349-355.
- VOGELEER, S., 1994, « Le point de vue et les valeurs des temps verbaux », *Travaux de Linguistique* 29, 39-58.
- VOGELEER, S. et DE MULDER, W., 1998, « *Quand* spécifique et point de vue », *Cahier Chronos* 3, 213-233.
- WILMET, M., 1997, *Grammaire critique du français*, Hachette-Duculot.
- 岸彩子, 2013, 『フランス語の直説法現在形の意味論』, 京都大学博士論文
- 中村芳久, 2009, 「認知モードの射程」 『「内」と「外」の言語学』、坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編), 353-393, 開拓社
- 東郷雄二, 2010, 「談話情報から見た時制-単純過去と半過去-」, 『フランス語学研究』 44, 15-32.